

会報

2007.10.5

第47号

戦没船を記録する会

〒105-0014 東京都港区芝2-8-13 睦マンション206
Tel:03-3452-5085 FAX:03-3452-2711 郵便振替001606-719515
URL:www.ric.hi-ho.ne.jp/senbotusen/
E-mail: senbotu@ric.hi-ho.ne.jp

会存続問題検討会開催

限定活動で継続も 資料の保管・ホームページ

本会第14回定期総会に提案された問題で、本会が同居している海上労働ネットワークが、7月に開催される定期総会で、資金問題等の関係で組織の解散を決定する方向にあり、本会が自力で事務所を確保して運動を継続することは困難なので、その時本会の運動をどうするか、拙速でなく十分な討議・検討の場を設けることが確認された。

その際の総会の論議では、船員や船舶の被害の実態を後世に伝えていくことは重要として、運動を継続していく場合、事務所をどうするか、所有する資料の保管と貸し出し、インターネットの継続方法、会員への連絡や会費の問題等々について意見があった。

7月19日開催の海上労働ネットワークの定期総会では、財政的に考えて2年程度の活動持続が可能であり、次期(08年7月)の定期総会で解散の時期を決定することとなった。

これを受けて本会は、9月21日、本会事務所に会長や理事・会員など17名が参加し、「運動の継続についての検討会」を開催した。

冒頭、会長の挨拶に続いて事務局長の経過報告で、本会が協力して開催してきた横浜、埼玉や静岡、岡山のパネル展のほか、今年は北九州市や府中市からパネルの貸出の要請があり、8月は電話での問い合わせも増加する時期であるが、特に今年はNHKの終戦番組「証言記録マニラ市街戦」(8月5日HB・16日BS1での放送)や、日本テレビの「おもいっきりテレビ=今日は何の日」の「封印さ

目次

会存続問題検討会開催	1
レイテ戦の戦没船(2)	2
輸送船団中最大の犠牲者数	
E-mail等の問い合わせ	4
2007年作成パネル	5
レイテ戦の戦没船展示資料	
海軍一般徴傭漁船	
・機帆船の調査を終えて	8
語り継ぐ集い	8

れた海戦悲劇(8月15日放映)に製作協力の要請があるなど、記録する会の存在が広く認められているなどと報告された。

また資金的には一般会計の残高が611,813円、特別資金残高が1,759,878円と報告された。

存続問題の討論では次のような意見があった。

事務所が無くなれば、活動の見直しが必要。現在の資料の保管、事務局態勢、連絡体制、展示会の実施、HPの維持等をどうするかとの具体的な課題も出てくる。

本会活動の必要性は客観的には高まっており、若い人に引継ぎ継続する方向で考えたい。

必要性はわかるが、会員の高齢化(若い人の掘り起こしも困難)や財政面からも活動の永続は困難、時期的なこともあるので、活動を引き継ぐ方策を考えた方がよい。

この運動は本来なら海員組合も責任あるはず、パネルを含め資料は海員組合に保管してもらい、パネル展等の活動にも協力してもらおう。

広がりが必要だが、結果的に活動が消滅するようではマイナスであり心残りだ。やってもらえるようにこちらも努力する必要があるが。

活動の拡大・発展は難しいとしても、最低限の活動はできるのではないかと。資料保管なら貸し倉庫(小型)もある。連絡は電話転送方式もあるし、定期的な会合も考えられる。HPは個人パソコンでも継続できる。必要に応じてニュース等の発行も出来るだろう。

資料の保管や譲渡は海員組合に限らず、本会の意志を生かしてくれる所を考えては?

次回検討会は、11月15日(木)1400から事務所で。

是非ご意見をお寄せ下さい。

レイテ戦の戦没船(2)

輸送船団中

最大の犠牲者数

レイテ戦は昭和19年10月20日、米軍のレイテ島東岸上陸によって始まったが、それまで一貫してルソン島決戦であった日本軍の作戦が、この日大本営の方針によって急遽レイテ決戦に切り替えられた。しかしその時点でレイテ島にいた日本軍は1万余の部隊だけであったため、増援部隊を送り込むために「多号作戦」が組まれたものである。

しかしレイテ島上陸に当たって米軍は、陸海空20万の将兵と多数の艦隊や空母と、470隻に及ぶ輸送船団を擁しており、レイテ島への輸送は極めて困難な状況の中で行われた。

そのため「多号作戦」では駆逐艦、海防艦や駆潜艇、制空隊の零戦や疾風を揃えて商船隊の護衛に当たり、また軍の高速輸送艦やSS艇、時には駆逐艦による輸送も行われたが、制海権、制空権を失った海域での商船輸送は、多大な損害を被ったのだった。

(第2～4次輸送船団については本誌前号参照)

第6次輸送船団

第26師団の食料や弾薬を積んだ神悦丸、神祥丸の船団は、11月27日駆潜艇2、哨戒艇1に護衛されてマニラを出港、28日オルモックに入港し直ちに揚陸を開始した。この日空爆がなかったのは日本軍の重爆や紫電、零戦がレイテ島東岸の敵飛行場を爆撃し、援護したためであった。しかし28日夕刻、敵魚雷艇の魚雷とロケット攻撃により、駆潜艇と哨戒艇が沈没、29日朝にはカーチスP40の攻撃により神悦丸が岸壁に接岸したまま擱座炎上した。神祥丸は荷揚げを打ち切って出港したが、P40の追撃により1330、護衛の駆潜艇とともに沈没した。輸送に成功しても、その帰途、あるいはマニラ帰着後、必ず沈められるのがこの頃の日本艦船の運命であった。

第8次輸送船団

第3・4次以来最大の船団は、赤城山丸、白馬丸、第5真盛丸、日洋丸の貨物船と、駆逐艦3、駆潜艇2、海軍の一等輸送艦の10隻で編成され、12月5日マニラを出港した。この船団は遊撃専門の特殊部隊68旅団(通称、星)を輸送するもので、第26師団とともに投入されるはずであったが、輸

送が遅れていた。

米軍はオルモック上陸作戦の傍ら、この船団攻撃にP40、P47、コルセア戦闘機など48機を差し向けた。船団は敵哨戒機に発見されるとオルモック上陸をあきらめ、レイテ島最北のサンイシドロに進入し、4隻の輸送船は砂浜に乗り上げ、人員資材の揚陸を始めた。10時すぎ第1波の空襲が始まり、敵機は爆弾を投下するとすぐに引き返し、パロンボンの飛行場でガソリンと爆弾を補給して再び襲撃し、護衛艦のマストの高さから千ポンド爆弾で攻撃し、この日だけで14回の空襲があった。

部隊の重火器を積んだ一等輸送艦も、揚陸にかかったが直撃弾4発を受けて擱座大破し、4隻の商船もことごとく砂浜で大破炎上したが、それまでに人員の大半は揚陸していた。

こうして期待された精鋭部隊も、砲2門と携行兵器だけの裸上陸となり、輸送船団は全滅した。護衛船団は大破したのも含め5隻がマニラに帰着した。

第9次輸送船団

12月9日1400マニラを出港したたすまにあ丸、美濃丸と海軍二等輸送艦2の船団は、第8師団(通称、杉)の歩兵、砲兵、工兵、迫撃砲隊など3,000人を乗せて、駆逐艦3、駆潜艇1に護衛されてパロンボン に向かった。この頃は既に米軍がオルモックに上陸したため、揚げ地が変更された。11日朝パロンボン沖に到着したたすまにあ丸は、コルセア機6機の攻撃を受け、左舷に千ポンド爆弾が命中して大穴が空き浸水し、2キロの沖合で沈没した。泳げる者は岸に泳ぎついたが、装備や食糧は失われた。

美濃丸は11日午後パロンボン沖に到着、直ちに荷揚げにかかった。1530コルセア、カーチスP40の計46機の空爆を受け、零戦15機が応戦したが、コルセアの千ポンド爆弾3発を受けて沈んだ。船体が岩礁に乗っていたため船体が水上に残り、生存者は護衛艦が陸岸に運んだ。海軍の輸送艦も港内で荷役して、この船団の輸送はある程度成功したが、レイテ島への船団輸送は、これが最後となった。

以上が大岡昇平の「レイテ戦記」に書かれた「多号作戦」の商船輸送に関する要約である。

レイテ戦記の特徴

「レイテ戦記」は商船の積荷の内容や、敵機や水雷艇の攻撃について、何時どこで、何型機何機何

隻の攻撃を受けたか、部隊の兵員や積荷をどれだけ揚陸できたかは詳細に記録しているが、輸送船の乗組員については全くといっていいほど無視している。たとえば岸壁で荷役中攻撃されて沈没した、能登丸や神悦丸の乗組員の行方や、第8次の4隻はことごとくサンイシドロの砂浜に乗り上げて大破炎上したが、その乗組員がどうなったかは、全く記録されていない。

これは、大岡昇平が書きたかったのが、レイテ島での戦争であり、各輸送船団が部隊や武器弾薬、食料などの隊貨を運んだのは、レイテ戦を戦うほんの一部であったからであろう。そして船員は船を動かすための要員であって、戦争をする部隊ではないと考えていたのだろうか。

ここで取り上げたレイテ戦記(以下 とする)と、われわれが戦没船の調査で参考になっている「戦時船舶史」「戦時輸送船団史」=駒宮新七郎著()との相違は幾つかある。また、各船社等が作成した「戦時船舶史」などと、前記の記録との相違も少なくない。その中の主なものを拾ってみよう。

船団参加船舶と戦没位置

第3次輸送船団には では「和興号=満州海運」が参加していることになっていて、船団がオルモック湾口に到着したところ、たちまち艦載機の猛烈な空爆を受けて泰山丸など4隻が撃沈され、せれべす丸と和興号は最寄りの海岸に接岸擱座して、乗員2,700人を上陸させたとしている。

しかし では和興号はこの船団に参加しておらず、昭和20年8月3日、敦賀沖で触雷沈没としている。また、せれべす丸は船団と共に、11月9日14時マニラを出港したが、10日03時ルソン島西岸のパザンギン礁で座礁し、乗船部隊を他船に移乗させたが、その後空爆で15日に沈没したと記している。

第6次輸送船団の神祥丸と神悦丸は、オルモック湾に突入し船貨の揚陸を行ったが、片方が岸壁で空爆により擱座し、一方は揚陸を完了し駆潜艇1隻と共に帰路についたが、途中で空爆により沈没としている。そして擱座炎上したのは では神悦丸であり、 では神祥丸である。また、帰路に沈没した場所は では明記せず、 もセブ島東岸沖としているのみで明確でない。しかし輸送船団史では、両船とも生存者なく詳細不明としており、この船団も玉砕したことを示している。

第8次輸送船団は、 では4隻の商船と海軍の

一等輸送艦第11号とともに、目的地をオルモックからレイテ島最北端のサンイシドロに変更し、砂浜に擱座して人員資材の揚陸に掛かったが、空爆により破壊されたと記している。しかし では、白馬丸がサンイシドロ近海で敵B24、70機の猛爆を受けて2分間で沈没し、他の船は擱座揚陸を敢行したことになる。これらはいずれも玉砕であり、泊地突入後の状況は不明としている。

これについて日本郵船戦時船史は、『戦闘の詳細は先に述べたとおり一切が不明だが、レイテ島決戦における「時間」と「場所」からいって、その時の戦場が凄惨類なき血の海であったことは容易に想像できよう。白馬丸はその名のごとく天空を駆ける白馬のように幻と消えた。』と記している。

第9次輸送船団は ではたすまにあ丸、美濃丸と、海軍二等輸送艦2隻によって行われたとしているが、 ではこの他に空知丸が加わっていることになっている。

また、 ではたすまにあ丸がパロンポン沖合い2キロのところで、美濃丸もパロンポン沖に到着、揚げ荷を開始したところで、いずれもコルセア機の千ポンド爆弾攻撃で沈没したとしているが、 ではたすまにあ丸は11日、数次にわたる空爆で1650、パロンポン西北西28キロ付近で、美濃丸は12日0600頃パロンポン西方18キロ付近で沈没としている。また空知丸は、たすまにあ丸が炎上沈没した後の1835パロンポンに入泊、12日0550揚陸完了、駆潜艇2隻に護衛されて出港、13日1500マニラ帰着、戦死者32名としている。

戦時輸送船団史によれば、この船団は9ノットで航行したが、美濃丸が直撃弾を受け火災発生が1615、たすまにあ丸が直撃弾を受けて火災発生が1620、美濃丸大傾斜、たすまにあ丸炎上航行不能が1630、たすまにあ丸炎上しつつ沈没1650、と記録されている。従ってこの頃までは3隻が船団航海していたと思われる。

そして空知丸は約2時間後にパロンポンに入港している。たすまにあ丸が沈没した位置はパロンポンの西北西28キロであるから、空知丸が約2時間後にオルモックに到着したのは納得できるが、同じ頃に直撃弾を受けて火災発生、大傾斜した美濃丸がどうしてパロンポンの西方18キロ付近まで移動して翌朝沈没したのか不明である。また、他の2隻が徹底的に攻撃されたのに、13日マニラに生還した空知丸が、どのような攻撃を受けて32名

の戦死者を出したのかも不明である。

日本郵船戦時戦史は美濃丸について、とほぼ同様な経過を記録しているが、揚陸作業中の1615頃コルセア機が超低空から投下した爆弾が、後部甲板と機関室に命中爆発し、1626に船長が退船命令を発し救命艇2隻で脱出、海に飛び込んで駆逐艦や駆潜艇に救助されたが、船長航海士らは船と運命を共にした。本船は遠浅の珊瑚礁に沈没し燃え続けたが翌朝全没したと記している。生存者の報告によるものとすれば、これが一番正確だろう。

大多数が玉砕した多号作戦

レイテ戦の「多号作戦」に参加した船舶は、生き残った和興号と空知丸を除き、すべて空爆によって撃沈されている。そして、過半数の船舶は乗組員が玉砕している。

順を追って見ていくと、第2次船団は能登丸が至近弾を受けて沈没したが、泊地で揚陸作業中であつたため戦死者は3人だけで、乗組員はオルモックに上陸した。現地司令部に今後の行動の指示を仰いだが要領を得ないため、業を煮やした船長が独断で香椎丸に便乗を依頼し、生存者全員が翌朝マニラに帰還した(郵船戦時戦史)。

第2次船団の生き残り3隻は、そのまま第4次船団として就航したが、香椎丸はオルモックで揚げ荷中空爆で沈没(船員3人戦死)、高津丸は人員のみ揚陸後出港したが空爆により船体を切断、乗組み全員(104人)と船砲隊全員が戦死した。

第3次船団は、せれべす丸が座礁したため積荷を他船に積み替えたが、船員17人が戦死した。他の泰山、三笠、西豊、天昭はオルモック湾内で空爆により沈没し、せれべすを除いた4隻の乗組員316人が全滅した。

第6次船団は神祥、神悦両船とも生存者なしと記録されている。

第8次船団は4隻がサンイシドロで玉砕している。日洋丸に生存者4人との記録があるが4隻の戦死船員は212人である。

第9次船団は生存者がいるが、半数以上が犠牲になっている。

これ等の戦没船乗組員の生存者は、護衛の駆逐艦や駆潜艇に救助されたために生き残った人が多いと思われる。擱座したり港で揚げ荷中空爆で船が沈没した乗組員で、陸に取り残された船員がどのくらいいたかは不明だが、レイテ戦の兵士の生存率を見ても、生き残れた可能性は極めて少な

い。そしてレイテ戦の戦没船員は、ガダルカナル強行輸送作戦の第1次6隻中戦没3隻生還3隻の戦没船員47人、第2次11隻中戦没4隻生還1隻、船体放棄6隻の戦没船員261人、合計308人。

第81号作戦、ポートモレスビー攻略作戦のいわゆる「ダンピールの悲劇」と称された7隻全滅の船団の戦没船員合計204人に比べて、多号作戦の戦没船員は834人と太平洋戦争中のどの輸送作戦に比べても、犠牲者の多い戦時輸送であったということが出来る。

E-mail等の問い合わせ

(要旨) 父は私の生まれる前に召集され、一度面会しただけであまり覚えがありませんが、最近、母の1周忌を迎えるに当たり、父の死に関する僅かな書類(2頁半程の軍人手帳)に目を通して、父の戦死は1944年9月16日、フィリピンからの帰途のバシー海峡である事を知りました。しかし、肝心の船の名前が記されていません。

そこで、ネット上で貴会HPの【太平洋戦争時の喪失船舶明細票】を拝見し、喪失船舶数の多さに驚き、心強くもあり、父が乗って居た船の名前とその時の様子が、始めて分かった様な気がし、感動しました。

しかし、この日にバシー海峡で沈没した輸送船は「徳島丸」と「第2小倉丸」しかありません。

そこで確認させていただきたいのですが、

- (1) 父の乗って居た船舶はこの2艘の内のいずれかだと断定しても宜しいものでしょうか。
- (2) 「徳島丸」だとしますと、軍人手帳の記録と貴会の資料とに沈没場所に少し相違点がありますが、これ位のずれは気にしなくても良いものでしょうか。
- (3) これらの船の沈没以前の動向を知りたいのですが、何か調べる手だてはあるのでしょうか。

<回答>(要旨)

- (1) 【太平洋戦争時の喪失船舶明細票】は、100総トン以上の商船を網羅しており、寄港地・沈没時期・沈没場所等から「徳島丸」と断定できる。
- (2) 徳島丸沈没位置 = ガランビ南東50哩(21-27N121-35E)(本会HP資料)が正しい。
- (3) 徳島丸の動静 = 9/5日マニラ着、9/8/1600マニラ発 - サンフェルナンド - アパリ - バシー海峡 - 9/16/0400バタン島バスコ発 - 16/0858敵潜発見 - 16/1355被雷 - 16/1356轟沈・179人戦没。

尚、後日より詳細な資料を送付、礼信を頂いた。

2007年作成パネル

「レイテ戦の戦没船」

2007年の新規作成パネルは、本誌に連載中である「レイテ船の戦没船」を題材とした。

空爆で全滅した輸送船団 レイテ戦の戦没商船17隻

・再度参加の船も

レイテ戦は昭和19年10月、米軍のレイテ島上陸によって始まったが、その時レイテ島の日本軍は1万余名であった。

この頃米軍はパラオやマリアナ諸島を基地に、マニラや台湾、沖縄を空襲していたが、日本の海上輸送力は潜水艦の攻撃もあって極端に減衰していた。日本軍の作戦は一貫してルソン島決戦であったが、大本営は急遽レイテ決戦に切り替えた。これは台湾沖航空戦の大勝利を信じてのことであった。

台湾沖航空戦でも米軍のレイテ島上陸後の比島沖海戦でも、日本軍は多大の損害を被り、以後の制空権、制海権を失い、フィリピンの地上戦で決戦を闘うことはなかった。

レイテ島決戦が決められた当時、レイテ島には第16師団が居ただけで、武器弾薬や食料の備蓄もなかった。そのためレイテ島決戦を遂行する兵員と資材を送り込むために、陸海空共同の増援輸送作戦として「多号作戦」が組まれた。第1次から9次にわたる輸送作戦では、駆逐艦や零戦など制空隊が船団護衛に当たり、軍の高速輸送艦による輸送も行われた。

しかし日々商船・護衛艦や制空機隊も激減し、船団が目的地に到着しても揚荷中に空襲され、兵士が持てるだけの荷物を携行して上陸するのみという状態であった。

その頃にはレイテ島東岸の米軍飛行場が完成し、艦載機だけでなく陸軍機が折り返し攻撃に加わるようになり、被害を増大させた。そのためこの輸送作戦に参加した商船は、全船が空爆の犠牲になり、うち14隻の乗組員はほぼ全滅した。

大本営は12月18日レイテ島決戦の放棄を決め、現地軍は自戦自活の戦いを命じたが、武器も食料もない将兵は、8万余名の97%がレイテ島の土と化した戦いであった。

フィリピン戦闘

(レイテ戦主体)年表

年月日	記 事
<u>1942年</u>	
1. 2	マニラ占領。
<u>1943年</u>	
10月	レイテ討伐軍派遣。
<u>1944年</u>	
4. 13	第16師団司令部レイテ島進出。
7. 7	サイパン島の日本軍全滅。
9. 15	(米)ペリリュー島・モロタイ島へ上陸。
9. 17	第33連隊オルモック上陸、23日壊滅。
10. 10	14、台湾沖航空戦、312機喪失。
10. 20	(米)レイテ島上陸。レイテ決戦決定。
10. 24	26、フィリピン沖海戦、多くの艦艇・航空機を喪失
10. 26	第1次輸送船団(軍艦艇)オルモック着。
11. 1	第2次輸送船団オルモック着、1隻戦没 第1師団主力オルモック上陸
11. 9	第4次輸送船団オルモック着、3隻戦没 第26師団主力オルモック上陸
11. 11	第3次輸送船団オルモック着、5隻戦没
11. 28	第6次輸送船団オルモック着、2隻戦没
11. 29	12. 03、第7次輸送船団(軍艦艇)、成功。
12. 7	(米)77師団オルモック上陸。
12. 7	第8次輸送船団サンイシドロ口強行擱座、 4隻戦没、第68師団兵員4千名揚陸
12. 11	第9次輸送船団バロンボン着、2隻戦没 ある程度揚陸
12. 15	(米)ミンドロ島上陸。
12. 18	レイテ島決戦放棄決定。
12. 22	第14方面軍・第35軍に自戦自活命令。
<u>1945年</u>	
1. 9	(米)ルソン島上陸。
2. 3~	3. 3、マニラ攻防戦。
2. 19	(米)硫黄島上陸。
3. 10	東京大空襲。
3. 17	硫黄島の日本軍全滅。
3. 26	(米)セブ島上陸。
4. 01	(米)沖縄本島上陸。
6. 21	沖縄戦終了。
7. 05	フィリピン諸島戦闘終了。

注：斜体字部分は米軍の動き

日本軍のレイテ島投入兵力と戦没者

部隊名	投入兵力	転進(概数)	戦没者	生還者(概数)
第35軍直轄部隊	10,932	100	10,682	150
第1師団	13,542	750	12,742	50
第16師団	18,608	0	13,158	580
第26師団	13,778	0	13,158	620
第3師団1部	5,357	0	5,117	240
第102師団1部	3,142	50	2,822	270
第68旅団	6,392	0	6,302	90
歩兵第5聯隊	4,552	0	4,422	130
航空船舶部隊	5,258	1,345	3,743	170
海軍部隊	2,445	0	2,245	200
合計	84,006	2,245	79,261	2,500

レイテ作戦米軍の損害

部隊名	戦死	戦傷	行方不明	合計
第10軍団				
第6軍直属部隊	141	813	7	961
第8軍直属部隊	61	40	3	404
アメリカ師団	162	566	3	731
第24師団	544	1,784	14	2,342
第32師団	450	1,491	8	1,949
第38師団	68	171	33	272
第1騎兵師団	203	726	2	931
第11空挺師団	168	352	12	532
ワイルド第1師団	14	38	0	52
独歩第108連隊	14	39	0	53
独歩第112連隊	32	128	0	160
軍団直属部隊	15	89	0	104
第24軍団				
第7師団	584	2,179	1	2,764
第77師団	499	1,723	4	2,226
第96師団	469	1,189	2	1,660
軍団直属部隊	80	363	0	443
合計	3,504	11,991	89	15,584

レイテ増援輸送作戦船団表

第2次輸送船団

船名	総トン数	所属会社	揚荷の状態	船員死亡	兵士死亡	戦没年月日	戦没場所	戦没原因・状況
能登丸	7,191	日本郵船	95%揚荷	3	81	1944.11.2	11-01N124-34E	空爆で積荷爆弾が誘発
金華丸	9,306	大阪商船						無事マニラに帰還
香椎丸	8,407	大阪商船	同上					同上
高津丸	5,656	山下汽船	同上					同上

動静 1944年10月31日0740マニラ出港、11月1日1900オルモック着、直ちに揚陸開始、95%成功。

11月2日1315米軍機24機と交戦、能登丸が至近弾を受けて沈没、他の3隻は無事マニラに帰港。

護衛 駆逐艦霞 初春 初霜 潮 沖波 曙、海防艦占守 沖繩 第11号 第13号

積荷 第1師団13,000名と隊貨(兵器・弾薬・装備・食料等)

第3次輸送船団

船名	総トン数	所属会社	他船に積替え	船員死亡	兵士死亡	戦没年月日	戦没場所	戦没原因・状況
せれべす丸	5,863	大阪商船	他船に積替え	17	18	1944.11.15	13-02N122-28E	座礁・空爆
泰山丸	3,587	宮地汽船	海没	65	不明	1944.11.11	オルモック湾	空爆
三笠丸	3,143	東亜海運	海没	72	47	同上	同上	空爆
西豊丸	4,639	大連汽船	海没	86	1054	同上	同上	空爆
天昭丸	4,982	東海汽船	海没	76	不明	同上	同上	空爆
和興号	2,111	満州海運	一部揚陸					空爆・擱座・離礁生還

動静 空襲と台風により遅発、11月9日0140マニラ出港、途中魚雷艇4隻の攻撃を撃退、11日10時過ぎオルモック湾口着。せれべす丸がレイテ島南端付近で座礁浸水、乗船兵士を他船に移乗させたが、15日空爆で沈没。オルモック湾口で艦載機347機の空襲を受け泰山丸、三笠丸、西豊丸、天昭丸が沈没、和興号が擱座。

和興号がこの船団に加入していない記録、せれべす丸がオルモック湾で擱座沈没の記録もある。
 護衛 駆逐艦島風、浜波、初春、竹、駆潜艇46号 掃海艇30号
 積荷 第26師団の6,000人と隊貨(兵器・弾薬・装備・食料等)

第4次輸送船団

船名	総トン数	所属会社	揚荷の状態	船員死亡	兵士死亡	戦没年月日	戦没場所	戦没原因・状況
高津丸	5,656	山下汽船	人員のみ揚陸	104	243	1966.11.10	10-58N124-35E	出港後空爆で
香椎丸	8,407	大阪商船	同上	3	16	同上	オルモック沖	空爆・ガソリンに引火爆発
金華丸	9,306	大阪商船	同上	7		1944.11.14	マニラ港	マニラ帰着後港内で空爆

動静 11月8日1030マニラ出港、9日1700オルモック湾口に到着したところ25機の超低空爆撃を受け損傷各船海防艦で人員のみ揚陸、10日1000マニラに向け抜錨、湾口のボンソン島沖で敵機30機の攻撃を受け高津丸、香椎丸が沈没。金華丸はマニラ帰着後空爆により沈没。

護衛 駆逐艦霞、潮、朝霧、秋霜、長波、若月

積荷 第26師団の約10,000名と隊貨(兵器・弾薬・装備・食料等)

第6次輸送船団

神祥丸	2,880	栗林商船	揚陸完了	66	39	1944.11.29	オルモック湾	空爆、岸壁で擱座炎上
神悦丸	2,211	栗林商船	揚陸完了	50	3	1944.11.30	セブ島北端沖	空爆

動静 11月27日1000マニラ発、敵機の攻撃をかわして28日1930オルモック着。夜間魚雷艇の攻撃があったが揚荷を完了。29日朝からの空襲で神祥丸は炎上擱座、神悦丸は護衛の駆潜艇と共にマニラ向かったが、セブ島沖で沈没。

護衛 駆潜艇45号、53号、哨戒艇105号

積荷 第26師団の隊貨の弾薬・食糧。

第8次輸送船団

赤城山丸	4,714	三井船舶	空爆で炎上	58	69	1944.12.7	サンイシドロ	擱座、空爆で炎上
白馬丸	2,858	日本郵船	同上	50	49	同上	同上	同上
第5真盛丸	2,599	原商事	同上	44	21	同上	同上	同上
日洋丸	5,482	東洋汽船	同上	60	48	同上	同上	同上

動静 12月5日1030マニラ出港オルモックに向かったが、空襲と敵軍上陸の報を受け7日1000サンイシドロに擱座揚陸。兵員は揚陸したが間もなく空爆により全船炎上大破、全滅の被害を被った。この船団には一等輸送艦第13号が参加していたが重火器を揚陸中空爆によって炎上沈没した。

護衛 駆逐艦梅、桃、杉、駆潜艇第18・38号

積荷 独立混成第68旅団ほか5,000名とその隊貨

第9次輸送船団

たすまにあ丸	4,106	岡田商船	空襲で海没	48	1149	1944.12.11	パロンボン沖	空爆
美濃丸	4,670	日本郵船	同上	43	1	同上	同上	同上

動静 12月9日マニラ出港レイテに向かったが、度々の空爆で損害を受けた。10日16時過ぎパロンボン沖で空爆により沈没。11日1000頃より延べ200機の波状攻撃を受け、美濃丸に続いてたすまにあ丸が沈没した。この船団には「空知丸」と輸送艦2隻の参加記録があるが、空知丸の詳細は不明。

護衛 駆逐艦夕月、卯月、桐、第2号駆潜艇

積荷 第8師団の歩兵、砲兵、工兵など3,000人と隊貨

海軍一般徴傭漁船

・機帆船の調査を終えて

会報第43号で海軍の一般徴傭漁船・機帆船の総数を3,665隻と記載したが、その後入手した新たな資料や手持資料の再調査等により、徴傭・喪失・解傭記録の空白が埋まり、民間側で戦後発行した記録等の追加もあり、現時点では4,640隻に及ぶに至った次第である。

だが、日中戦争当時に徴傭され、太平洋戦争でも再徴傭された船が74隻あるので、実際に徴傭された隻数は4,566隻で、特設艦船に入籍された763隻を加算すると実数は5,329隻となっている。

従って、太平洋戦争で海軍が徴傭した漁船・機帆船は、約5,000余隻と認識する。そこで、戦争の影や底辺で海軍戦力を支えた延4,640隻の一般徴傭漁船・機帆船の一断面を述べてみよう。

これら漁船・機帆船の徴傭状況を把握したのは、海軍省兵備局第3課が内部各関係部門の船舶徴傭の現状を認識し、執務参考用として配布した図書であり、昭和18年6月1日現在の「徴傭船舶名簿」(軍極秘)と昭和19年6月1日現在のそれと2種類だけで、いわゆる「赤本」と証した機密書類である。

この資料は、開戦1年前に海軍が民間船舶の調査・利用(徴傭)等民間側に対するあらゆる事項の所掌を強化する目的で、軍務局より分離した兵備局が調整したものである。

このほか、昭和20年3月1日現在、海軍省の軍務局第3課が作成した「軍務3機密第1号」として作成された、タイプ打ち込みガリ版刷りである<極秘>「一般徴傭船配属状況」がある。

作成が軍務局になっているが、敗戦濃厚な当時、兵備局を軍務局が併合し、船舶徴傭を担当する第3課の業務引継ぎ資料として調整したもので、敗戦間近の記録で貴重な資料である。

兵備局の2冊には、それぞれ記載時点での徴傭と当局が認定した徴傭・喪失の記録があるが、軍務局の「一般徴傭船配属状況」には徴傭の年月日は記載されていない。

喪失関係は、海軍省が戦時中、戦死認定を目的とした各資料のほか、所管する艦艇・船舶の行動記録もあった模様だが、戦後焼却したり連合軍に没収されたりして大部分が所在不明で、漁船・機帆船等は僅かな資料が残されたのみではないかと推察される。

戦後海軍省が解体されて第2復員省となり、鎮守府も復員局と名称を替え、徴傭された船舶の残務処理としての解傭業務等の経過を記録した諸資料は、

呉・佐保・舞鶴等の復員局では僅少で、横須賀復員局は皆無であり、戦後解傭の経過の把握はできないのが現状ではある。

以上のような現状での調査過程で徴傭・喪失・解傭等の経過が一応確認されているのは約80%の3,849隻である。

この内約1,800隻余りは外戦部隊として、前線の基地輸送や基地の雑務のほか、当時タンカー不足の状況から、戦争遂行に不可欠な原油輸送に従事した機帆船や食糧確保に出漁した北洋漁船、更にはソロモン海域で兵員や物資の強行輸送等に充当された船もあった。

約2,000隻が内戦部隊として各鎮守府に配属され、港湾任務・各管轄基地間の輸送や沿岸防備に活躍し、乗組む船員達は戦場の裏方として活躍したのであった。

これら3,800隻の中には、戦時日誌等にその活躍ぶりが詳細に記録されているものもあり、感銘深いものもあった。

残り20%の約800隻については、前記資料等で戦後解傭年月日は確認されてはいるが、徴傭年月日が不明であり、中には少数ではあるが、活躍した船名のみの記載もあり、空白箇所は今後の調査に期待するしかない。

最近得た情報であるが、防衛省防衛研究所の付属図書館は部分的に一般に公開され、調査・研究への協力を惜しまないとのことである。

一般徴傭漁船・機帆船の実態解明が一層促進されることを願って止まない。

(2007.9月 正岡 勝直)

語り継ぐ集い

今年9月21日に日比谷公会堂で「あの戦場体験を語り継ぐ集い」があり、1,600人以上が参加しました。「戦争体験放映保存の会」と「マスコミ世論研究所」の主催で、証言を永久保存する語り部として、元兵士が中国やガダルカナル、フィリピン、ノモンハンやシベリヤの戦場体験を語り、戦争反対や憲法九条改悪反対を訴える人もたくさんいました。

この集会で本会の川島会長が来賓として挨拶し、会員が何人か参加しました。2時間半の間に36人(予定は50人)もの人に語らせるのは無理があり発言者に気の毒でしたが、参加者の1/3位は戦争を知らない世代に見えました。

私たちの戦没船を記録する会もあの戦争を語り継ぐ目標を持って活動していますが、若い人たちに引き継ぐことや、社会的に広げることには、いま一段の工夫と努力が必要だと思います。(篠原)